

インタビュー

「いのち」に迫る環境教育のシステム化

成熟社会の“心の汚染”が環境破壊を促進

甲南大学文学部教授 谷口文章氏に聞く

「いのち」と「環境」 - この2つは、本来切り離しては考えられない基本テーマだが、これをとうやうや結びつけ、体系化していったらいいのか、学問的にも極めて難解な分野であることに変わりない。ここにきて人類の存亡に重大な影響を及ぼしかねない環境ホルモンが大きく浮上し、テーマの切実性がいよいよ具体化しつつある。そこで「外なる環境の自然的破壊と社会的破壊は、内なる環境の精神的破壊によってもたらされる」という観点から、成熟社会が宿す“心の病い”を倫理学および心理学の基礎の上に「環境教育学」の構築を旨としている甲南大学・谷口文章教授に、わが国の大学、研究機関が立ち遅れている「環境学」について語ってもらった。

環境問題についての関心が深かまり、小、中学校でも授業に取り入れている学校が増えている。その推進役が日本環境教育学会と言われている。

立ち遅れた環境教育

「その日本環境教育学会ですが、大学関係の研究者、小、中、高の教育現場の先生方、生涯学習を入れた社会教育の関係者、それに行政関係やナチュラトストの方も加わって構成されています。日本全体からみれば、環境教育はまだまだ弱いという感じですね。この5月、北京大学創立100周年行事として13の国際会議が開催されました。中国全土および世界から6万人が集まり、その中の1つに「環境科学と持続的発展」という会議がありました。日本からは私と東京大学の先端科学技術研究センターの先生の2人が参加しました。国によって環境教育に対する重点の置き方が違いますね。その中で中国は4つの分野を強調しています。1つは、小、中、高の基礎教育です。2つ目は北京大学などが中心となって大学における専門教育をやっています。もう1つは社会人向けで、環境関係の人たちを含めて在職者教育というのがあり、最後に市民に対する啓発、啓蒙という社会教育をやっています。

中国の環境教育の技術的な面はある意味で遅れていますが、政策は国の体制によってうまく作られているように思いますね。そして政策の理論的骨子は大学が中心にならねばならないということです。このような中国の動きを見ていると、日本の大学ももっと環境教育あるいは環境学を重視しなければならないと感じますね」。

大学レベルでの研究、教育がもっと必要

日本の環境教育の現状は。

「日本では9年前から、小、中、高の先生方や行政の方々が力を入れてこられました。現在の環境教育の分野は、教育大系の先生方が意欲的にやっておられます。しかし専門的なところまではいかず、いわゆる教養課程の中の環境教育、環境学という形での進め方ですね。

そして専門になると環境学ではなく、環境科学になってしまいます。

ところが北京大学のある先生と話をしていると、日本の大学における環境学のレベルは非常に高いと思っておられる。私に言わせると、それはむしろ逆で、大学での取り組み方は中国の方がすごいと思いました。中国の全大学に約140の環境学部と1,300ぐらいの環境学科があるんですね。日本の大学では環境学部と正面から名乗っているのは、数える程度しかありません。これを聞いて北京大学の先生がびっくりしておられました。中国の大学が環境問題に取り組み始めたのは約20年前で、学問的に整備されたのは10年ほど前からです。間もなく北京大学の田徳祥先生方はじめ他の先生と共同研究を始めますが、私たちは大学専門レベルにおける環境学及び環境教育をやらねばならないと考えています」。

先生の甲南大学での取り組み方は、

環境学分野を含む大学院設置を申請

「総合科目というのがかつてあって、この中で「21世紀の人間と地球の問題を考える」というテーマでその科目をつくりました。本学の先生を中心に他の大学の先生方も入れて12人のスタッフで2コマぐらいのオムニバス形式で3年ぐらいつづけ、教養課程が解体したのを受けて広域副専攻というのができ、総合科目と対応しながら16科目によって構成された環境学コースが独立してできあがりしました。それは半期ずつですが、大学における教養レベルでは、甲南は早かったと思います。とりわけ環境人間学、環境教育との取り組みですね。環境教育については大阪教育大学の鈴木先生が早くから提唱され、一緒に研究させていただいています。専門では人間科学科の中に「人間環境論」と「同」というのがあります。そしていま大学院の修士課程に「環境倫理」、「生命倫理」、「人間・環境学特論」、「環境教育学特論」、「環境学演習」という講座を開き、そのような形で研究レベルでも努力をつづけていくつもりです。大学院は今年度、申請中です」。

一般論として「環境」がついた学部や学科はあるが、中身がよく分からないという声がある。

「悩む」内容が変ってきたいまの若者

「いまの若者が悩むという場合、傷を受けたと思い込んでいる悩みなんですね。だから癒やされるという言葉がいまブームです。夕日を見て「わあ、きれいだな。心が癒やされた」と言えば、私たちは何だか患者のような気分になる。

しかし、哲学や文学が本来求めていたものは、美しさに感動することなんです。決して病気ではない。癒やされることではありません。生き方と世界の見方です。

日本はいま成熟社会に入り、心身共に飽食状態にあります。すると自分の世界に閉じ込めりがちになり、そこへ他人がうっかり入り込むと傷を受けたと感じます。これは心理学的レベルの「悩み」ですが、かつてのような人生の挫折から生じた悩みというより、もっと自閉的で自己完結的な神経症的なものです。

その治療のためには、自閉的世界から開放されて外の世界で他者との関係や自然のリズムを知る必要があります。例えば乾布摩擦すると、皮膚が丈夫になる。そういう意味で環境教育のフィールド活動などは、体を動かすことによって自閉的な世界から外に出て、癒やすだけでなく、力強さとか感動する心とかを培い、本来だれもがもっている自然の状態に戻していくことであると思います。またそのような環境教育が若者の心の環境汚染を浄化できる時期にきているのではないかと思います」。

それは成熟した日本だけの問題か、それとも。

社会の成熟度によって変る環境意識

「日本の若者の中にもエネルギッシュな者がいるし、一概には言えない。発展途上国の留学生を見れば、自分たちで国を背負うのだとギラギラした者もいれば、北京やタイのバンコクなど大都市にいくと、ある部分は成熟社会特有の現象として自閉的で自己中心の傾向がみられます。今年2月、甲南で行った環境国際シンポジウムでは、このために特別に学生会議をやりました。そこで明らかになったことは、社会の成熟度によって環境意識がちがうということです。

社会の成熟度が発展途上の場合、自分たち若者が環境問題を放置しておけないという意識が高く、積極的に環境問題に取り組む姿勢が見られます。これに対し、日本の若者や世界各国の大都市の若者は、「自分とは関係ない」という考え方をもち傾向があります。

シンポジウムは2年前に行ったのにつづいて2回目ですが、その間、日中共同環境教育シンポジウムを開いたり、その少し前にアメリカの著名な自然保護運動家を招いて公開講演をやったりして環境学の基礎固めに努力しています。

哲学・心理学・環境学は一つのもの

私の専門は哲学で40歳ぐらいまで古典哲学を中心に勉強してまいりました。それが20年ほど前から心理と環境をやるようになったのは、これから述べます理由によります。

私も若いころ人生の悩みがあって哲学を専攻することになり、そこで例えば人間とは何かについて形式的に勉強しましたが、文献ばかりで面白くない。甲南の経済を出たあと阪大の大学院文学研究科で7年ばかり倫理学を学んだり研究したあと、国立奈良工業高等専門学校に職を得たのは32歳の時です。そこで奇形ザルをテーマにした講義をやる一方で、学生のカウンセリングにあたっていううち催眠療法や箱庭療法から心の問題に入り込み、それが現在までつづいているわけです。哲学で人間を形式的には捉えられましたが、心の問題に関心が移ると心理学を本格的に勉強しました。これで人間の全体像が分かると思ったからです。しかし、ふと気づくと、人間が置かれている場、すなわち環境が大きく人間形成に作用しているということで、哲学と心理学と環境学の3つが一つに結びついたわけです」。

環境教育の進展状況

3つの分野を統合した環境学というのは非常に特異なケースでは。

「環境科学の分野からのアプローチはあるのですね。阪大の森岡先生、京大の高月先生などがこの分野のエキスパートです。この分野は環境教育でも技術が中心になりますが、私もがやっているのは環境学、環境倫理を中心にした総合的な環境教育学です。学内には理学部の先生もおられますので総合化できる可能性があり、その場をお膳立てするのが当面私の仕事かなと考えてやっています。小さくは甲南大学の総合研究所の研究会、大きくは国際シンポジウム（甲南学園平生太郎助成金）などの場でみなさん、議論したり、研究をする。この場づくりをしっかりやらないと大学での安定した形で専門的研究は進まないだろうと思います。日本の技術面の突出は世界的にも素晴らしいと思います。しかし環境学としてまとまるかといえれば必ずしも十分でない。

ここで学校教育の方に話を移しますと、環境教育は1科目にするのか全科目に入れていくのかいま議論されています。これは国際レベルでやらなければいけない。例えばユネスコの専門家の意見は1科目ではだめで、総合科目のようにどの科目にも入るのが必要だというの

ですね。タイ・カナダの研究所では全科目に入れることを前提にやっていますが、日本の場合は、国語、社会、理科、美術、道德の科目にどういう形で入れていくのか模索している段階ですね。

学会の運営委員会で最近問題になつているのは、まず「環境教育学」というものを確立しなければならないのではないかといいるところまでやっています。それは環境教育の教育原理みたいなものです。教育原理があるからこそ教育心理や教科教育法など色んなものが生きてくる。この原理的な環境教育学をやっと先の学会で提唱したばかりです。例えば滋賀大学の川島先生の場合は、教育学が御専門ですから教育学における理科の教材を開発されています。これはもちろん大事なことでありますが、教育大学系もしくは一般教養系に片寄ってしまうのは、私たちにも問題があると思います。

私はもっぱら大学の専門レベルでやらねばならないと考えていますし、学問としても環境教育の原理、環境教育学の哲学のようなものが必要ではないかと思っています」。

環境問題の1つとして以前は公害問題が中心テーマになったことがある。

専門家でも勘違いする幅の広さ

「9年前に朝日新聞で日本環境教育学会の設立が報道され、環境学会だと思って電話したら教育学会だったということでした。環境教育は環境学の専門家でも間違えるほど幅が広く、まだまだ分かりにくいところが多いです。

そのころから私が言っていたのが心の環境です。10年前になりますね。自然科学の分野の人が多いから、環境といえば自然環境のことばかりを話される。ところが日本でいちばん最初に提起されたのは公害問題だったんです。これは言い換えると社会環境です。そのころ心の環境はどうなんだとあまりうるさく言ったものだから、そのあたりの分担が回ってきて現在もつづいているわけです。そこで私が考える環境とは自然環境、社会環境、精神環境の3つに分けられます。もう1つ従来からの主張を加えますと自然、社会環境の外界の2つの環境を破壊したのは内界の心の環境汚染によるということですから、内の心の環境が汚染されているからこそ精神環境破壊が起こり、外の環境を破壊してきたのだというものです。欲望というのがあってそれが無限に突っ走る。例えば社会環境だったら経済優先主義ですね。自然環境だと、人間中心主義の考え方ですね。そういうものはすべて心の環境汚染からきている。これを10年ほど前から言いつづけ、この大学や学会で研究させていただいています。最近では環境教育学という分野でまとまりつつありますから、これでもっと強力に進めていきたいと考えています」。

最近、大きな問題になっているいじめ、不登校も精神的環境の破壊と関係あるのでは。

“心の汚染”と環境カウンセリング

「それはありますよ。私も長年カウンセリングをやってきました。しかし、最近ではそのような特殊な場面を設定しなくてもよいと考えています。例えば、部屋に入ってくる学生に、きょうの授業はどうだったなど普通の話をする日常的にやっていたら、悩んでいる学生もいつの間にか治っていく。また学生を連れて国内旅行、最近では海外が多くなっていますが、この合宿の機会と一緒に食事したり、研究発表したりするとみんなうちとけてくる。発表のあとは夜11時ごろから明け方の5時ごろまでさあ飲もうとって飲みまわります。このあと日が昇りかけると山へ奇形ザルの調査に行こうとって調査地の山へ登る。私も彼らもみんなクタクタですが、それでもみんなついてくる。私はこれを高校までにやっておいて欲しいと思います。親も教師も共に活動する。カウンセリングの場面を設定したり、特別のコミュ

ニケーションの言葉を使うまでもないことです。

とにかく現代の成熟社会では身の回りは神経を使うことが多すぎ、ここの学生でも気の使いすぎで授業前の朝から寝ている者がいます。本学には本校舎から少し離れたところに広い野外施設がありますから、学生たちをそこへ連れ出して木を切ってベンチをつくったり汗を流すことをやっています。都会でも田舎でもそのような環境は探せばどこにでもあります。だから「環境カウンセリング」はどこでも可能だということです。

環境カウンセリングとは聞きなれない言葉ですが、2つの意味で使っています。1つは身体を動かして心の汚染を浄化する心理的カウンセリング、もう1つは大気環境査定とか審査とか環境庁認定のカウンセリング。これは5年間の実習及び実務経験が必要です。その両方を甲南大学でやろうと思えばできるのではないかと思います」。

究極は人間の生命にいきつく学問体系という気がする。

環境といのちは同じ

「日本保健医療行動科学会にも属していますが、環境といのちは同じものなんです。

倫理学も従来の文献学では具体的な規範性をあたえることはできない。例えば、脳死の判定の基準をどこにおくかということも本来は単純なはずですが、具体的にはケースバイケースです。当事者と医師の関係だけではなく、家族の関係、社会的なコンセンサス、文化的背景といったさまざまな要因が考慮されねばなりません。これらの要因はまた全部環境とかがわってきます。

私の場合は、2つの学会にまたがり、倫理を共通の基盤としながら、生命倫理と環境倫理を同じ視点からお話できるかなと思います。保健医療行動科学会には医療関係者が多い。西暦2000年ぐらいに保健医療をめぐる「いのちの問題」について国際会議を甲南大学で行いますが、これも医療環境や生命環境など環境と深い関係があり、非常に面白い会議になると思います。

西洋の医学、西洋の考え方は効率、合理性に重きを置き生命のみを考えますから、いのちを支える環境を捨てて前に進む方向できています。そこでこれと合わせる形で、いのちの環境を基盤とする東洋医学及び東洋の考え方を表に出した会議にしようとしています。つまり中国の漢方、インドの古典療法とかを紹介し、人間、いのちの全体像から考えることが必要ではないかということです。

ネイティブの知恵に学べ

地域の環境でもそうです。5月にカナダのグロリア先生（ヴィクトリア大学学部長）も本学においでになりましたが、彼女はネイティブ・インディアン過去の歴史、知恵を生かし、人間らしさを取り戻したいという謙虚な姿勢で環境問題と取り組んでおられる学者です。例えば、カナダの先住民は1万年近くこの地に住んでいて環境を一切汚していないし、壊さなかった。ここ数百年の間に西洋人が入ってきて環境を壊してしまったという反省が彼女を動かしているわけです。彼女に言わせると、科学はモダン・ウェスタン・サイエンス、つまり西洋の近代科学なんだという認識です。ネイティブの人たちは、病気になった時、ハーブなんかを使い、病気を治している。西洋科学はこれをナンセンスだと言っているけれど、実際に治る人がいる。このネイティブの知恵の方がよっぽど科学的ではないか、なぜ伝統の医療を西洋の近代科学は認めようとしないのかという主張です。つまり、近代科学によって立っている現代人の万が事実を認めようとしないのはよほど非科学的だということです。私もそうだと思います。

従来無視されてきた地域における伝承、知恵はまだまだあるはずです。これらを今根気強く汲み上げていく必要があり、学内でも提唱していることの1つです。環境に関する医療学会、倫理学会、教育学会を甲南大学で開催できたことはその意味で非常に幸せだと思います」。

危機意識を高めた環境ホルモン

最近注目されているものに環境ホルモンがある。

「人間のいのちを展開するDNAは生のプログラムと同時に死のプログラムも組み込まれています。この2つがバランスよく働かないと、9本指の奇形サルが生まれたりします。奇形ザルは20年近く前から私もずっと注目してきておりますが、これは生長ホルモン系に作用する残留農薬のせいだろうと言われてきました。最近、環境ホルモンつまり内分泌系攪乱化学物質が体内に入ってホルモン様の作用をするということで注目を集めています。この問題を含めて生命体を支えるもっとも大事なのは免疫系ですから、残留農薬も環境ホルモンもホルモンの機能障害を生ぜしめる点で根本は同じだと思います。そして環境ホルモン問題は環境破壊についての危機意識を高めたと言えます。

奇形ザル・水俣病・環境ホルモンの警鐘

奇形ザルの話に戻りますが、9本指のサル、手首から先がないサル、短肢、腰が曲ったサルが餌づけをすると出てくるんですね。餌づけをするということは日本人が食べている食物と同じものです。昭和47年当時、あるモンキーセンターでは70%が奇形ザルで、その年には奇形ザルの発生が全国的な傾向として表われた。

私は科学者ではないので、みなさん、これをどう考えますかという形で訴えてきました。

環境ホルモンは世界的なテーマであり、私も最近、カナダやタイでの大学や学会で報告しています。北京大学100周年のシンポジウムではこの奇形ザルと水俣病、環境ホルモンについて話しました。水俣病はともかくとして、奇形ザルのことは外国の学者もあまりご存知なく、ビデオや写真を見てびっくりされていました。環境ホルモンについても正確に把握されている方は中国では少かったようです」。

環境問題にシステムティックに取り組んでいるとみられる中国でもエアポケットがある。

望まれる環境学の成熟

「環境学とはいえ、中国では科学です。北京大学では環境学部と環境科学センター、環境保護センターという3つの大きな組織があり、ほとんどが科学者です。北京大学や中国国家環境保護局の人たちが、自分たちがいまいちばん弱いのが社会科学系、つまり環境経済学、環境社会学、人文系の環境倫理でスタッフ面でも手薄だと述べられていました。これらの分野が揃ってこそ、環境学が進展するし、さらにその上にとった環境教育学も確立できると思います」。

お話を聞いてきて何か環境学の体系が少し分かったような気になりました。ありがとうございました。ご研究の成果を期待しています。

(「私学ジャーナル」 Vol. 21 No. 8 インタビューより転載 発行元： 株式会社 私学教育振

[\[RETURN \]](#)